

まんのういけひ もん 満濃池樋門

明治3年
満濃地区 神野

満濃池樋門は、貯水容量1,540万^{ちよすいようりょう} m³、満水面積138.5 ha^{まんすいめんせき}を誇る我が国^{へクタル} 最大級のため池、満濃池の底樋隧道^{そこひすいどう}とその出口です。

満濃池は嘉永7年(1854)6月に起^{かえい}こった伊賀上野地震の影響で、7月に決壊^{けつ}しました。その後、修築の計画が立てられるものの実行に移されることなく、満濃池より水を引いていた那珂郡、多度郡、^{なかくん たどぐん} 鵜足郡の農民は毎年のように干ばつに悩まされました。

慶応4年(1868)、榎井村百姓総代^{えな い ぐらひやくしやうそうだい}の長谷川佐太郎が提出した修築の嘆願^{たんがん}書が明治新政府に認められ、以降、佐太郎は高松藩、丸亀藩、多度津藩の意見の調整などに奔走しました。明治2年(1869)、高松藩執政松崎渋谷右衛門が^{しやう}視察を行い、その結果、堤防西側の自然

の大岩盤^{だいがんばん}を掘り抜いて石穴底樋^{せつけつそこひ}とする改築が決まりました。石穴の貫穿工事に^{かんせん}は、寒川郡富田村の庄屋、軒原庄蔵が^{きよう}起用されました。軒原庄蔵は安政5年(1858)にさぬき市大川町の弥勒池の^{おおかわちやう}石穴貫穿工事を成功させた実績がありました。明治2年(1869)9月16日に石穴貫穿工事が開始され、明治3年3月15日に貫通しました。この時、掘られた石穴底樋^{せつけつそこひ}は長さ30間5尺3寸(56.21m)、高さ3尺5寸(1.06m)、幅3尺(0.91m)になります。同じ年の6月に築堤工事も完了し、満濃池は16年ぶりに甦^{よみがえ}りました。

樋門は石造で、間口3.5m、高さ4.2m^{せきぞう まぐち}です。底樋の坑口周りに五角形の迫石^{はくせき}(坑口アーチ部分を支える石)用い、石造りのコーニス(帯状装飾)、袖壁、柱頭付^{おびじやうそうしやく そでかべ ちゆうとうつき}たんちゆう こうもん かざ ^{そこひ}端柱で抗門を飾っています。現在の底樋は、その後の嵩上げ工事で197mまで^{えんちやう}延長されています。

自然を利用した底樋と、坑門が堅固で美しい建造物であるといった特徴が評価され国より有形文化財に登録されました。



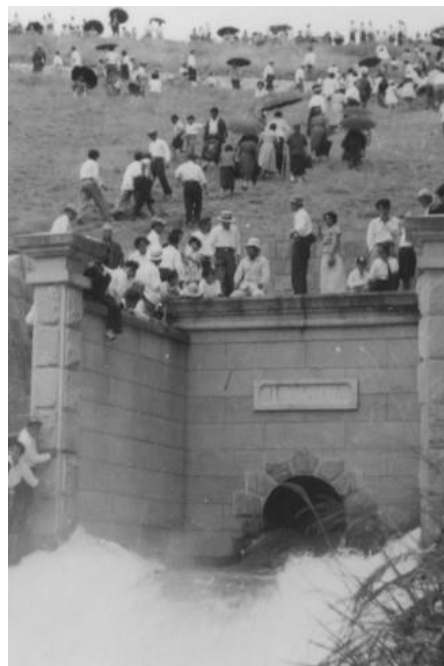
満濃池樋門 全景(西より)



満濃池樋門 遠景(ほたる見公園 遊歩道より)



初ゆる抜きの様子



昭和 20 年代後半の初ゆる抜きの様子



昭和 4 年(1929)の樋門の様子
第二次嵩上げ工事完了後の
ゆる抜き時に撮影されたと
思われます



満濃池の貯水が樋門より勢いよく流れ出る様子

令和 2 年 4 月作成

